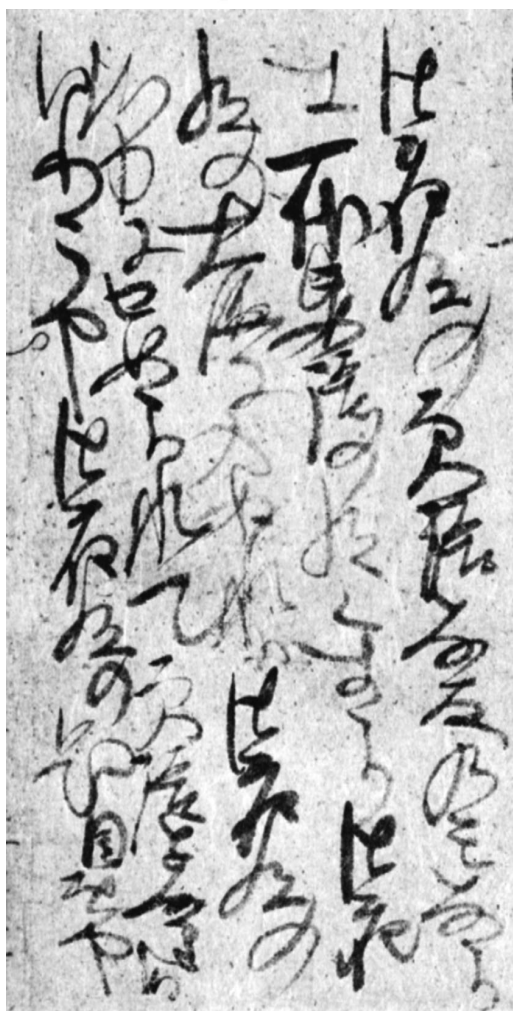




今月の御聖訓



法華經の実語なるのみなら

ず、一代妄語の経々すら法華

經の大海に入りぬれば、法華經の

御力にせめられて実語となり候。

いわうや法華經の題目をや。

【妙法尼御前御返事 全集一四〇五頁】

目 次

今月の御聖訓

年頭の辞	菅野憲道	1
【目師会講話】「御三祖の法門的意義」	菅野憲道	2
年頭にあたって	尾林弘三	9
【新年の抱負】松井照雄・森 秀之・井元恵子・佐藤千賀子・針本登代子・宮崎和子		10
読書案内『思考の整理学』	松田銘道	15
「興風談所の研究成果(六)」	菅原関道	16
【恵日だより】		20

一月の行事 睦月詠草 恵日俳壇 訃報

年頭の辞

丑年抱負

菅野憲道



あけましておめでとうございます。

令和二年は、世界中がコロナ禍に覆われた年でした。この数年、地震・台風の自然災害も予測を越えるものがあり、どうしても「立正安国論」の三災七難の警告を思い起こさずにはおれません。

過去の歴史を調べてみると、大災害や飢饉、疫病が猛威を振るうと、その後によってくるのは乱世と、戦争のようになります。そうしてみると、世の乱れは人々の心の問題と直結しておりますから、宗教とも深い関係を有することになります。現代人の精神が貧しく浅薄になってきていることは多くの人の指摘するところですが、青少年がスマホのゲームに夢中になるように、多くの大人達もイノベーションなどという社会構造を一変させるような新技術に夢中になり、次々に世間に弘めていきますが、果たして本当に人類に幸福をもたらすものであるかどうか、疑わしいものです。覇権競争の末に技術・情報・軍事力・富の寡占状態が進み、格差は拡がる一方です。

話は変わりますが、その昔、中学校の恩師から卒業記念に色紙を頂いた事があります。親元を離れて修行中の小坊主だった小生に何かと目をかけてくれた先生です。

「怠らず行かば千里の果ても見ん、牛の歩みのよし遅くとも」と道歌が達筆で書かれてありました。最近、この歌をよく思い出します。正信覚醒という大望を懷いて久しくなりますが、道はなお遠く、日も暮れてきました。遅々たる歩みかも知れませんが、今生も来生も歩みを止めないで精進したいと思います。今年もよろしく願います。

目師会講話（要旨）

御三祖の法門的意義

菅野憲道

《三という字の持つ意味》

日目上人は、元弘三年（一一三三）折から醍醐天皇が新政を樹立したことにあわせ、法華本門の正法に帰依されるよう天奏するため、七十四歳というご高齢をもって、日郷・日尊をお供に上洛の旅に立たれました。その途次、垂井の宿で十一月十五日に入滅なされましたが、そのお姿はまことに日蓮大聖人の広宣流布への大望を体现されたものです、

代々を経て思いをつむぎ富士の根に烟よ及べ雲の上まで

という辞世が伝えられておりますが、三大秘法の仏法が広宣流布することを願って、その生涯を閉じられたことは、末法万年にわたって門下の僧俗の信仰の鑑とすべきお



日目上人の雪中天奏の図

姿であります。

それ故に毎朝夕の勤行の観念文において、大聖人・日興上人

・日目上人の御三祖を、御報恩供養申し上げております。

観念文は、日寛上人が著された「六巻抄」の最後のところに信心修行の肝要として仏法僧の下種三宝を示されており、これを祖型として伝えられているものです。もちろんそれは、宗祖の昔に端を発し、日興門流がずっと伝えてきた末法における仏法僧の三宝なのですが、そのことがどういう意味を持つてるのかはあまり語られていません。

とりわけ大聖人が宗祖、二祖は開山日興上人、三祖が日目上人として「祖」と尊称され、三師塔のように、別して供養塔がたてられたり、広宣流布の暁に再び出現され

て一閻浮提の御座主となるという伝承や耳引法門、給仕、問答第一の伝説など、幾多の伝説でその徳が語られてきたのです。

そこには深い意味があるはずですが、今の宗門では法主絶対信仰に変質して、法主に信伏随従することがすべてというような自縄自縛の閉塞状態にあり、法門の研鑽など望むべくもありません。正信覚醒運動のめざすものは、富士の立義の再生でもありますから、少々御三祖をめぐる法門について考えて見たいと思います。

ところで、

「売り家と唐様で書く三代目」

という川柳がありますが、事業や会社を起こした場合、俗に三代目で成否が決まるといわれます。創業の功も継続があつてのことであり、事業や流儀も継承者によつて基本形が固まることが多いようです。

次に三番目までをもつて代表とする慣習法があります。オリンピックや各種の競技会では、ほとんどが一位から三位までメダル受賞の対象となるように、ものごとは上から三つをあげて代表とします。三大都市とか三大桜、三名園など、多数の物事の中から三つをあげることで個と全体の把握につながります。

また、例えば器物の形態を説明するのに、縦・横・長さ（奥行）（H、W、L）の計測値を聞けば、具体的にそのもののおおきさがどれくらいかというイメージが頭の中に形成されて、それで他人と共有可能な概念が出来上がるのです。

この場合、リアルな事物、例えば段ボール箱とかペンとか形而下の事物だったら分かりやすいのですが、形而上の概念、例

えば善悪であるとか幸福・不幸、苦楽等というような概念を規定し、他人と共有しようとするとなかなかそうはいきません。微妙に違つてしまします。

《概念化ということ》

まして寿量品に「顛倒衆生」「顛倒見」と説かれるように、衆生は苦と楽、不浄と清浄、無常と常住、無我と我執など見方が逆転してしまっているのですから、仏法の概念を直ちに説いても、心に届きません。イメージすら描けないのです。

そこで、仏教には、もともと因明といつて弁論の技術から発達した論理学があり、龍樹菩薩の四句分別などは、弁証法的な概念規定の方法とも言えます。

そこで、事物の本質を把えて概念化する場合、事物がその事物であることを説明するため、多くの場合三つの角度で表現する方法がとられます。

ですから、仏法における様々な概念でも、多くの場合三つの視点から説明することが行われますので、仏法には三という用語が極めて多く、三学とか三蔵、三道・三徳、三観三諦、三因仏性等々、中でも一番耳に親しいのは、三蔵法師などといわれる三蔵（経・律・論）だと思っています。

また、我われが仏法を学ぶ上においては戒定慧の三学ということがありますが、三蔵と三学では経Ⅱ定、律Ⅱ戒、論Ⅱ恵という関係にあり、「三学俱に伝うるを名づけて妙法と曰う」といつて、妙法には必ずこの戒定慧の三学が具わっていることが説かれております。

また、御本尊供養の三器も「此大良薬・色香美味・皆悉具足」の経文の示すように華（戒）・香（定）・水（慧）に通じ、三身・三諦・三因仏性にも通ずるものです。日蓮大聖人はこの三学を下敷きにして、本尊、戒壇、題目の三大秘法を説かれたのです。

また同様に御本尊を讃嘆供養する時の三具足（お花と灯明と香）をお供えします。が、この三つを具えることで具足、満足する、三学や三徳、三身、三諦、三因仏性等がすべて具わっているという意味です。基本的にこの三つをもって仏様に供養し、報恩に供えるのです。

さらに、仏様の身体について三身が説かれます。

「一身即三身、三身即一身、三世常恒の御利益」

と観念文にあります。が、仏様の仏身には、法身・報身・応身という捉え方があります。具体的にはこの現実世界にお生まれになって入滅される仏は応身如来で、法身とかけ報身は肉眼からは見えないのです。

もっとわかりやすい例でいえば、譬喩品の「今此三界合文」に出ている主師親の三徳は、仏様の持つておられるお徳は、一切衆生の主であり、師であり、親であるということです。そういう三つの徳を備えておられるのが仏様で、それで観念文の大



日目上人の茶毘所近くを流れる相川

聖人のところでは主・師・親の三徳と唱えるのです。

その他、三妙合論とか三世間とか、三道即三徳とか、あるいは三因仏性、三界、三観三諦（空・仮・中）、三世、三業等、いろいろと三つの視点から仏や仏法を説明したものです。

さらには經典の説法形式も三周の説法といまして、法説周・譬説周・因縁周と三度方式を変えて同じ説法をくり返します。このように角度を変え、表現を変え、くり返し仏法を説かなければ、妙法蓮華経や仏などの概念を人に伝えることができないことから、そういう三つの要素をもって、教えを説いたのだと思います。

因みにキリスト教の神学にも三位一体説があります。天地創造の神ゴッドがいて、その使いのキリストがいて聖霊がいて、その三者が一体であるという説が、中世くらいに提唱されるようになります。これが神学の主要な教義となっていくます。これを、ある宗教学者は、権威と恩寵と教導であると説明しています。ところ

が、これはそれよりはるか昔から法華経の譬喩品に、仏様の徳を強調するのに主・師・親の三徳として説明されているのです。それで、妙法蓮華経の御本尊・大聖人をイメージする時に、そういう三つの徳、我が親しき父母であるし、主君であるし、また自分を教え導いてくれる導師であるとの思いに至ってこそ、

御本尊に帰依していることになると思います。

物事は一方だけでは表現できないものがあって、それを別の角度から説明していくことが行われるのです。

本宗の仏法僧の三宝の立て分けですが、例えば日興上人の「諸宗要文」などには、無量義経を引かれて、

「善男子、是の持経者もまたまたかくのごとし。諸仏の国王と是の経の夫人と和合して、共に是の菩薩の子を生ず。」

と披露され、これを要するにあらゆる仏様と法華経が一体となって、それを受持、信じて修行する人々が生まれるということ、それが諸仏の国王とこの経の夫人が和合して、その子供、菩薩の子が生まれるという教えになってくるのです。

これを日有上人はわかりやすく、

「一、仰せに云く、開経に云く、諸仏の国王と此の経の夫人と和合して菩薩の子を生むと云へり。諸仏の国王とは高祖日蓮聖人なり。此の経の夫人とは日興上人なり。菩薩の子とは日目上人是れなり。されば当門徒の信は此の心得一大事なり。しかる間、当信の人などあらん其の当座にも、此の心得あるべく候なり。」（聞書拾遺）

と解説されていて、富士門流においては、もちろん法華経と大聖人は当然ですが、そこからもう一段発展して、御三祖が三宝の一分として帰依の対象となっているのです。これが観念文として展開するのです。

大聖人が御在世の時は、一幅の曼荼羅本尊を授与されてこれを信心修行の対境とし、大聖人に従って共に修行していたのですから、大聖人が靈山浄土にお帰りになられた後は、日興上人

は御本尊と大聖人の御影像を安置して、「如在の礼」、日蓮大聖人が生きて在す如く信心修行していくことが、富士門流の原点となったわけです。

ほかのグループはどうかというと、曼荼羅本尊を授与されていながら本尊に迷って釈尊像や四菩薩像を造立してみたり、法華本門と迹門の違い目に迷い、時が経つにつれて雑乱勧請や呪術化がひどくなつての謗法の制誡も失われてしまうのです。

本宗の御本尊安置の化儀は曼荼羅本尊一幅でゆるぎない伝統があります。寺院道場などでは法本尊（曼荼羅）と人本尊（御影像）が人法一箇である姿を化儀に表して、いわゆる御影堂式の御本尊安置が滅後直ちに行われるのです。

《法義上の日目上人》

それだけのみならず、今度は日興上人も御入滅されれば大聖人と師弟不二にして靈山浄土に帰って行かれるのです。そうすると日興門下は日蓮日興の師弟不二の境界の中に御本尊を拝しますから、それが化儀の形として、中央に曼荼羅本尊を安置して向って右に日興上人御影像、左に大聖人御影像を安置する三宝別体の様式が生まれます。ここにおいて法華経の行者の師弟不二、境智冥合の姿が御本尊として祀られ、大聖人滅後の衆生に示されたのです。

いうまでも無いことですが三宝別体の様式は、大聖人滅後約五十年のことですから、門流、教団の化儀や教義が日興上人によつて整束されてゆき日目上人以降ほぼ定着してゆくのだと思います。

それは当初御影堂だけでしたが、日有上人の頃客殿が建てられ、紙幅の御本尊と両尊御影が祀られていたものと思います

それで、本山客殿の場合は日目上人の座（導師座）が横手に設けられ、南面する御本尊様に正対してお経を上げるのではなく、東向きに座が設けられているのです。

意味するところは、広敷に座る参詣の僧俗は、いわゆる地獄・

餓鬼から菩薩の九界の衆生で、大聖人・日興上人は仏界（須弥

壇）にいらっしゃる。鏡板囲んでの座

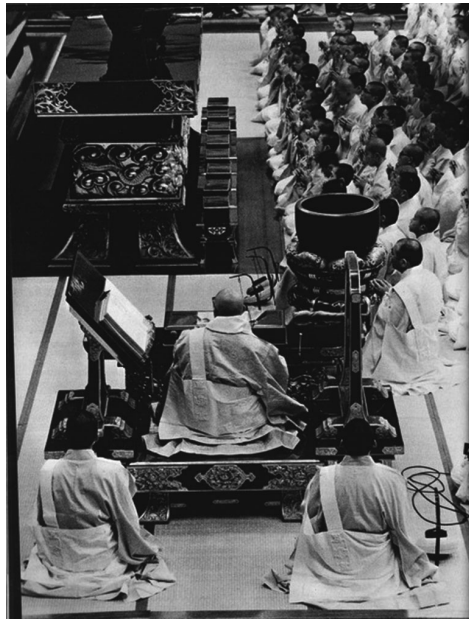
配は堂宇そのものが十界互具の世界を象徴し、導師座は九界の衆生と仏界の

間にて、衆生を御本尊・大聖人へ取り次ぐ形です。

その座は九界ばかりではなく仏界にも半分懸かっている、要するに、日目上人は九界の頂上にあつて、衆生成仏の代表でもあることを示しているのです。

「当流行事抄」では客殿の座配によつて靈山浄土を移した道場と意義付け、ここで勤められる丑寅勤行によつて朝な朝な即身成仏を遂げる最も重要な法会と位置づけるのです。

ですから、宗開兩祖の師弟不二の姿は個別的関係ではなく、それが一体となつて日目上人はじめ未来の弟子檀那、一切衆生に開かれた普遍的真理を有することを示すために、わざわざ大聖人・日興上人の師弟の三宝の座から半分九界に出たところに、日目上人の座が設けられたのだと思います。



日達上人の頃の客殿での丑寅勤行

そのことが、例えば十三世の日院上人は、「諸仏の国王と是の経の夫人と和合して共に是の菩薩の子を生ず矣。御血脈の奥書内証は、本門戒壇末法弘通の正導師範は疑滞なき者なり。此の金言に応じ法水を汲む輩、争かこれを信ぜざらんや」（「要法寺日辰御報」）

と、無量義経の説によつて、大聖人・日興上人と日目上人をお祀りしていたのが日興門流の一番大切な血脈であるのです。本門戒壇の本尊を末法に弘めていく正導師が日目上人であることは、少しも疑いないというものです。

勿論、日目上人を衆生成仏の代表として拝するといつても、日目上人だけを分立して特別に尊ばれるのではなくて、その徳は三宝一体の上から大聖人に摂入されるものです。

要するに、大聖人・日興上人だけが成仏を遂げたのではなくて、一切衆生にも成仏の道が開けたというところで、日目上人はじめ、無量の大衆も続々と常寂光の靈山浄土への道に入つていけることを表されているのです。

つまり、御本尊様とは我われ信行者の対境として向こう側にあるばかりでなく、本来、我われもまた御本尊の宝塔の中に入つて南無妙法蓮華経と一体となる、御本尊と不二に、信心決定の成仏の世界があるのですが、これは感得するほかないのです。その取り次ぎとして一閻浮提の座主日目上人という意義づけが

されるのも現実の貫主・管長が取り次ぎとなれば、俗世間の鼻
屑や利権が混じり、政僧の胸先三寸ということになりかねませ
ん。未来に亘って日目上人が、一閻浮提の座主として取り次ぐ
という法門は、末弟の行位を制している意味もあります。

名字初心という自覚が一番大切な点で、そうでなければ、「謂己
均仏」というような慢心を起こして大聖人に肩を並べたり、終い
には大聖人より偉くなったつもりで暴走してしまうのです。

今の創価学会などは、大聖人は広宣流布の予言をしたが、実
際に広宣流布したのは池田先生で、大聖人の予言を虚妄ならし
めず実現した偉大な師匠であるなどと宣伝して、いつの間にか
大聖人を乗り越えて、自分が本仏になってしまった。とんでも
ない邪法、間違った教えです。

勤行・唱題する時に持つ数珠の親玉は、父玉ともう片方は母
玉で、大聖人と日興上人になぞらえていて、それが合掌し一体
のところは仏子日目上人の成道が適うのですが、それと同様に
我われ自身にもまた成仏の道が開けることになるのです。

「六巻抄」の最後は数珠の由来を明かしながらこの下種三宝
を念じて唱題すべしと結論づけ、「行者慎んで次第を超越する
勿かれ」と強く末弟を戒めており、今の宗門の悪弊を見越した
ような制戒で筆を置かれております。

以上、曼荼羅本尊一体式、御影堂式、客殿式とあげて御本尊
様の莊嚴安置のあり方を紹介したのですが、結局それぞれ同じ
南無妙法蓮華經の法体を秘めた御本尊であり、しかもそれは信
行者が当体蓮華を証得するところにこそ御本尊の意味があると
いうものです。

我われは御本尊様を拝しても、心の底ではあらぬことを考え
たり、あるいは本当の渴仰心、求道心も薄く、なかなか気づか
ないのですが、ただ一心に南無妙法蓮華經とお題目を唱えて拝
していく時に、必ず自分の小さな我見が消失して、南無妙法蓮
華經と一体となったところから、清浄なる仏心が生まれてくる
ことを経験すると思います。そのことの上において、御三祖と
いう意味が、自ずから觀念文の中に取り入れられていることにな
るのではないかと思うのです。

ものごとを自分たちが理解したりそれを確認したりする上で、
一本調子に正面から見ただけでなく、横から見る、逆次にみる、
あるいは物事を見ている自分を別の自分が見ている、その自分
はけっして別物ではなくて、見ている自分とその見ている自分を
見ている自分とまた一体である、二にして不二というように、
多様な視点があり、視点を変えてみれば日常気がつかなかった
光景が見えてくるようなものです。妙法蓮華經はそうした三千
の諸法を妙用する不可思議の法ともいえないでしょうか。

寿量品の中には、
「非実非虚。非如非異。不如三界。見於三界。（実に非ず、
虚に非ず、如に非ず、異に非ず、三界の三界を見るがごとく
ならず。）」

とありますが、本当のところは世俗の虚実を超えたところにあ
ることを、お経の中でも弁証法と似たような発想のもとに語ら
れていることを、心にとどめておいていただいたら幸いです。

南無妙法蓮華經

(了)

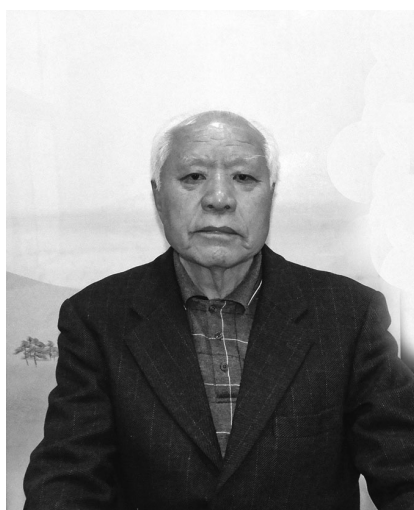


令和三年
かのとうし
辛丑年

恭賀新春

年頭にあたって

講師 尾林弘三



あけましておめでとうございます。

令和三年の新春を寿ぎ源立寺法華講の皆様のご多幸とご健勝をお祈り申し上げます。

昨年、コロナウイルスが感染拡大して、法華講皆様の参詣が人数を制限し事前に申込みの参詣となり、大変不自由な状態が続きました。

今年一月一日の勤行会も人数を各四十人とし事前申込制になりました。

昨年十二月には、外国でコロナウイルスのワクチンが開発、承認されて、イギリスとアメリカで医療従事者や高齢者を対象にワクチン接種が始まりました。

日本でも春頃からワクチンを輸入して医療従事者や高齢者を

対象者に優先して予防接種が行われる見込みです。少しは予防が出来るようになるでしょうが、まだまだ国民全体がコロナウイルスの対策を十分にした生活をしなければならないと思います。御住職様のご指導で、昨年『恵日』十月号の「一生成仏について」の講話で、

「法華経が如何に大切なお経であるか、一般のお経と法華経の関係を建築に譬えりと、法華経は大塔本体の如く、爾前経は足場の如きものです。」

と説明されており、「法華経の成仏」の所では、「

この法華経の法門は、凡夫のままで妙法蓮華経を受持するなから成仏できる、と保証されたのです。それは、「十五具」・「一念三千」の妙法蓮華経をそのまま実相と受持して信行することが、法華経の中には説示されているのです。」

と説かれ、「色心不法」の所では、いのちの有り様を説明し、ご指導してくださっております。

世間では、コロナの感染拡大を防ぐ為に、少しでも外出を自粛して、人との接触が密になることを避けるよう叫ばれ実施されております。

家に居る時間が多くなるこの間に、『恵日』を読み返してみ、又、家族にも読ませる等していただき、法華講の皆様が、年の初めに一念發起して、「志」を新たに、「求道心」を起こして自己の信心向上と、「法灯相統」に取り組んでいただきたいと思っております。

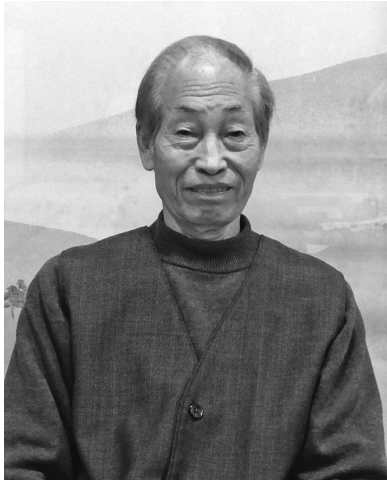
今年も正信の道を歩むことを願って、年頭の挨拶といたします。

新年の抱負

(順不同)

年始のごあいさつ

豊能地区 松井照雄



源立寺法華講の皆様、新年明けまして御目出度う御座います。

旧年中は、コロナ、コロナ、コロナで、字の如く明暮れました、読者の皆様も、もう辟易されている

ことでしょう。今や地球全体が、コロナ菌にスッポリ包まれている様な物ですから。

地球上の各国は、自国の防衛に必死であるのが今の現状であります。

我われも外出時はマスク着用、帰着時手洗いの慣行、他人と

大声で会話はしない等、常識として日常生活に入り込んで来ました。

そして、不要な外出は控え、人混みには近づかないというのが、今の生活の有り様なのであります。

お陰で、我われが属しております源立寺も、御住職の御高配に依り、事なきを得ております。私たちも、心して決め事を守り、明るく楽しい会合に参加したいものです。

そこで私の考えですが、新型コロナも対コロナワクチン(予防薬)は、先進各国がしのぎをけずっており、近日内に完成をする様に思われます。それを待つて我が国に輸入されて、コロナ難も一過され、この現況をくぐり抜けるのではないかと私は思っております。

いずれにせよ、新型コロナにかからないことが、御本尊様に守られている証拠だと確信して、これからの信心に励みたいものです。

そして、皆様には確信に満ちた良い年になりますよう、お祈り申しあげます。

瞋恚は善に通ず

大阪地区 森秀之

令和三年新年明けましておめでとうございます。

益々信心堅固に、新しい生活様式を一人一人が実践しながら、異体同心に信心修行に共に精進して参りましょう。

微力ながら、時間が許す限り、源立寺へのご奉公に益々努め



てまいります。

昨年一年間は、新型コロナウイルス感染症という未知なるものが猛威をふるって、今年もまったく予測もできない状況です。

昨年は、菩提寺参詣も予約制へ変化、行事についても中止等、今までの常識が、非常識となりました。流行語大賞は、密集・密接・密閉の「三密」が選ばれるなど、人との接触は極力避けることと、一人一人が主体的に新しい生活様式を考えて、生きる価値を求めていかななくてはいけない、自己責任の時代に突入したと感じます。

無政府状態とは言いませんが、コロナ騒動で、コロナの感染減少のための対策と、経済の優先が天秤にかけられ、人命より経済効果を優先するという矛盾した政府の対応が、後手、後手に回って、無力さを痛感したのは私だけではないと思います。

日本も、アメリカや欧米諸国同様に、貧富の差が確実に進んでいると感じますが、一方で、まだまだ高齢者の中流意識も根強く残っていると思います。

アメリカや欧米諸国と違うところは、私も含めて、日本人の世間の空気を読む気質や、勝ち馬に乗るといった性質によるものなのか、暴動が起らなかったことだと思っています。

「諫曉八幡抄」の中に、

「瞋恚は善惡に通ず」という一節があります。

成仏を妨げる要因と説かれている食欲・瞋恚・愚癡の三毒は、基本的には悪なのですが、その悪である瞋恚について大聖人様は、理不尽に対する瞋り、重大な局面で声を張り上げる勇氣、感情は善に通ずる、と仰せだと思っています。

今年は、さらに人類存続の新たな局面になってくると思いますが、このコロナ禍も「仏の計らい」、私たちの信仰心が試されているのだと心得て、日々大聖人様への恋慕渴仰の心を忘れず、仏力・法力を信じて、お題目を信じて行じて、

「三毒変じて三徳と為す」

と、たゆまぬ求道心を起こしていきます。

病もまた楽しけり

槻木地区 井元恵子

新年あけましておめでとうございます。本年もよろしく願い申し上げます。

法華講の皆様には、今年もご健勝のこととお慶び申し上げます。昨年、私は何十年かぶりに、病気を患い、薬漬けの日々を過ごすことを余儀なくされました。

振り返ってみると、二十五歳の時に急性肝炎で三週間入院、三十五歳の時に子宮頸がん、四十五歳頃から自律神経失調症、そして今、慢性膵炎。今までの病気は治る病気でしたが、今回



は一生付き合っていくことになりました。

私にとって昨年は色んなことを考える年でした。

慢性膵炎は、発症してから女性は寿命が十五年ほどらしく、母が亡くなった年にちょうど

どなるなあ……なんて思い、家の中の整理をしいたほうがいいな。と、断捨離を始めました。

他には、沢山の食べ物制限や、薬の副作用や消化不良による気分の悪さなどありますが……。特に落ち込むこともなく今のうちにやりたいこと、行きたい所など考えた結果、大聖人様の聖跡を訪ねてみようと思ったのでした。

昨年は、法華講の井上さんや柏原さんにお世話になりながら、何とか大聖人様の流罪の地・佐渡島と、御生誕の地・安房方面へ行くことが出来ました。

病気になるなかつたら行こうとは思わなかったので、「このやまいは仏の御はからいか」なんて思ったり、普段仕事で忙しいからと、ともに勤行すらしなかったのに、ちゃんと勤行をするようになり、「病によりて道心はをこり候か」などと考えたりしました。とにかく、昨年の私は、病氣のお蔭で少しは前より信心を深く思うことができた年でした。聖跡を訪ねる前は、お題目を唱えている大聖人様のお姿をただただ思い浮かべながら勤行をし

ていましたが、聖跡を訪ねた後からは、現代に生きる私には耐えがたい法難を一身に受けながら布教活動をされる安房での御姿、遠い佐渡から故郷を偲ぶ御姿、塚原問答での勇ましい御姿など、お傍にいさせてもらえるような感覚を体験し、思い浮かべるだけで感涙させていただいています。今年も、また大聖人様のお傍へと、最晩年を過ごされた身延山行きを目標にしたいと思っています。

御書を読むのがなかなか難しい、と言っている私に、時々「呂で御書の一節を送って下さる井上さんや、『恵日』に寄稿文を載せていただいたことから、武政さんが、十界についてわかりやすく載ってる冊子のコピーを下さったりと、行動を起こすと色んな方の有難い縁や想いに触れることができ、本当に心から温まる一年でした。

世間では、昨年从今年にかけてマスク生活が始まり、考えもしなかったことが起こりました。大聖人様の時代にも、大地震や疫病が流行り、

「旅客来たりて歎きて曰く、近年より近日に至るまで、天変地天・飢饉疫癘、遍く天下に満ち、広く地上にはびこる。午馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半を超え、之を悲しまざるの族敢えて一人も無し。」

と、「立正安国論」にもあるように、時が違えども同じことが現代にも起こっています。世界中でコロナの死者数は昨年十二月現在で一五〇万人を超え、骸骨こそ路にあたりはしませんが、大変な思いをされている方は沢山いらっしゃることでしょ。こんな時こそ、正しい信心をしつかり持ち、助け合って生

きていきたいと思います。
何事も受け入れ、今年も「南無妙法蓮華経なるべし」と、精進してまいります。

新年のご挨拶

北摂地区 佐藤千賀子



二〇二一年、明けましておめでとうございます。

昨年の一月から、感染が始まり、三月には学校が一斉に休校になり、秋からまた感染爆発して、十二月には過去最多になつてしまった新型コロナウイルス。

経験したことのない一年でありましたが、信心している私たちは決して悲観的にはならず、心は閉ざされないので。勿論、人混みを避け、手洗い、マスク着用、アルコール消毒をして、御本尊様に題目を唱えることで、前向きな気持ちになれるのは感謝です。コロナウイルスがこのような状況にあり、辛くても信心している私たちは、宇宙、自然の恵み、美しさを、眺めれば癒されます。高齢者は、もし感染してしまったらどうしようと不安な気持ち

ちもあると思いますが、題目を唱えて乗り切ろうとする力が生まれるでしょう。今年一年、どうか皆様、お氣をつけて頑張つて下さい。

今年は、三月末に二年ぶりの地区総会、五月に第五十回法華講総会が予定されておりますが、安全第一をご住職が考えて下さり延期になるかもしれません、

「冬は必ず春となる。」

を信じて、共に祈りましょう。

皆様と源立寺でお会いして、信心の喜びの会話が出来るのを楽しみにしております。

ともに生き、ともに栄える

兵庫地区 針本登代子



「ともに生き、ともに栄える」。これは私の大好きな言葉です。

この言葉は、パナソニック創業者である、故松下幸之助氏の数ある言葉の中の一つです。

これは、人間誰しも一人では生きられない。にもかかわらず、ともすると自分本位に事を運んで、結局はゆきづまってしまう、

お互い常に、ともに生き、ともに栄える道を、素直に謙虚に追い求めていこう。という意です。

この言葉を見る度に、御書の中の「生死一大事血脈抄」で、「日蓮が弟子檀那等、自他彼此の心なく、水魚の思いをなして、異体同心にして、南無妙法蓮華經と唱え奉る処を、生死一大事の血脈とは云うなり。然も今日蓮が弘通するところの所詮是なり。」

が浮かぶ。故松下氏は、大聖人様の精神を見事に受け継がれた方なのだ、と頭が下がります。これから私も、ずっと朝夕の勤行に励み、大聖人様の精神を少しでも受け継いで生きられたら、この上ない幸せだと思います。

源立寺の菅野ご住職と、大谷ご導師に導かれながら、皆様と共に、元気で、正しく、法華經の信仰に励みたいと思います。

コロナを生きる

豊能地区 宮崎和子

「立正安国論」の時代に突入した今、コロナとこれから起きるであろう大地震と大雪等々、また、巨大地震に原発事故が起き、日本沈没が現実味を帯びてくるような予感がしてくる今日この頃です。今こそ、この真実の法華經を世に広める時が来たのです。創価学会の人々に云うのです。お題目を唱えているのにこんな世の中になるのはおかしいと思いませんか。学会の人々は、日蓮大聖人様を忘れて、池田会長さんが一番偉い人と思ってい



我われがする事。

①大地震は、太陽が光を失い、月のように太陽がなった時、大地震が三日以内に発生します。

②震源地は、動物が騒ぎます。すぐ公園へ。

③人類は、コロナ、大地震、台風と、これからもっと大変はことになります。これは、人間が本能の趣くままに、自然破壊をしてきた、自然からの報いなのです。これからは、森を作ろう。コロナにかからないためには、

①毎日緑茶を飲むこと。八杯ぐらい一日で緑茶がコロナに良いことは、奈良県立医大の先生が、九十九パーセントコロナ菌が死滅したと発表されました。

②マヌカの蜂蜜は、ありとあらゆる菌を殺すと云われている。もしも熱が出たり、咳が出たら、すぐ葛根湯を四粒飲んで、マスクをして寝てください。朝咳が止まり、熱も下がっていきます。これがだめならすぐ医者に行くこと。命ある限り、お題目と折伏を。

るから、こんな世の中になると思わなければならぬのです。だから、真実の法華經を広める時が来たのです。我われが一つになって頑張ろう。もう一つは、コロナにならないために、

英文学者でお茶の水女子大名誉教授であつた著者は、今年、九十六歳の生涯を閉じた。一九八三年、独自の発想と洞察力で、アイデアを熟成させる方法など、生きた知識を詰め込んだが本書を発行したが、その後、文庫版では百二十四刷、累計で二百五十三万部にも達するロングセラーとなった。昨年から今年にかけて、東大生や京大生に一番読まれてい本として話題となるなど、三百冊以上の著作の中で、まさに代表的な書となった。

三十六前に綴つたことが、今に至つても少しも色あせないでいるのは、ただ、洗練された語りかけるような文章に引き込まれることにあるのでなく、私たちが日々学んでいる知識を、どのように人生そのものに役立てていけるか、今を生きる本質について問題の本質を突いていることにあると思われる。

そのことは、最初のエッセイ、「グライダー」の一文に示されている。

そこでは、学校で詰め込む知識は、自力で飛べないグライダーのようなものであり、そのため、「優等生とはグライダーとして優秀」にすぎず、独力の知識と

読書案内

松田銘道



思考の整理学 外山滋比古

外山滋比古著

『思考の整理学』

ちくま文庫
定価五七二円

いう、エンジンのついた飛行機とは違う。自力性を失い、創造性に欠けた知識でだけでは、「コンピュータという飛び抜けて優秀なグライダー能力」に「仕事をうばわれる」だろうと。

その指摘は、ネット社会の今日の現状をまさに予見している。

本書では、「グライダー兼飛行機のような人間となるには、どういうことを心がければいいかを考えたい」との想いから、著者が日頃体験していることも含め、知的刺激をそこに注ぎ込んでくれている。

たとえば、知的活動について、

1、既知のことの再認。

2、未知のことの理解。

3、新しい世界への挑戦。

と分類している。

知識だけに頼ったりしても、そのほとんどは、「既知」の「再認」であつたり、「未知」の「理解」とはなりえても、独

創的な「挑戦」という、自らの生き方を高める意欲をもたらすことにはならない、と分析している。

AIが席捲する今にあつて、「思考の整理」は不可欠となる。

興風談所の研究成果(六)

興風談所 菅原関道

『興風叢書』〔4〕

『興風叢書』〔4〕は平成十年十月十三日刊で、大石寺三十一世日因(一六八七～一七六九)の『宗旨建立三四会合抄』上中下三巻を収録する。底本に同五十世日誠(一八三六没)の写本、対校本には山口範道本と筆者不明本(上巻のみ)を用いたが、実見したのは各複写である。山口本の上下二巻は日因の正本を書写したもので、中巻は天保十四年(一八四三)の中山定得の写本を転写したものである。日誠本には所々に日因以降の補記が見える。本書の翻刻・脇注・編集・まえがきは渡邊信朝が担当した。

宗祖遺文には「宗旨建立」の日を建長五年三月とするものと、四月とするものの二種があるが「結論的には、日因上人は三月二十八日に大聖人は出世の本懐を述べたが本門の直機が少なかったために、今度は四月二十八日に本門の大事を置いて迹門の妙法を弘め、しかして後に真実の妙法を示した」(八頁)と、渡邊は解説する。他に注目できる事柄に、日因は現在大石寺六世の日時筆とされている大石寺蔵『御書目録日記』を日時筆と断

定しておらず、『三師伝』の著者についても「当山四代日道上人三師御伝、同六代日時上人三師御伝」(一九頁)と記して一定していないことが挙げられる。ともあれ七十六才の時の著作である本書は、日因教学を知る上で貴重である。

以下科文を示す。(1)正に三月・四月の会合を明かす(二五頁)

①三月二十八日の真文を引く(一九頁)②四月二十八日の正文を引く(三八頁)③正しく三四の会合を明かす(五〇頁)。(2)文証を引いて会合す(五三頁)①末法弘通の題目に内証外用あることを明かす(五四頁)②寿量品に内証外用あることを明かす(六五頁)③法華経一部に内証外用あることを明かす(七一頁)④一代聖教に内証外用あることを明かす(一〇一頁)⑤神力品の別付属に内証外用あることを明かす(一一五頁)⑥嘱累品の総付属に内証外用あることを明かす(一二二頁)。(3)問答料簡(一二五頁)。

なお山上は『興風』八号七〇頁にて、建長五年三月二十八日は仲間内に対する私的な宣言、四月二十八日は対外的・公的な宣言と推測していることを付言しておく。

『興風叢書』〔5〕

『興風叢書』〔5〕「宮崎県題目石塔調査レポート」は平成十一年六月十三日刊である。興風談所では平成十年十一月、翌十一年三月・四月の三回にわたって宮崎県の題目石塔の内、日興門流に係するものを調査した。本書はそのデータ記録である。調査場所は十六箇所、石塔数は五輪塔が二一六基、板碑等が五六一基の計七七七基に及び、その題目や銘文等は墨書と陰刻の二種に分かれる。石塔を水とタワシで丁寧に磨いて土埃や

苔を取り除くと、墨書や陰刻が浮かび上がってきて一種感動的である。妙円寺趾の板碑2の4番(二六五・一九七頁)の墨書は比較的きれいに写真に撮られていて、中央に南無妙法蓮華經の題目、左右に神力品の是人於仏道決定無有疑の經文があり、下部に明応十年(一五〇二)の父の十三回忌に際して建立し、上行菩薩所伝の秘法によって成仏は疑いないと書かれた銘文がある。

妙円寺趾には古い板碑もあり、保田妙本寺の実質の開山である日郷の弟子日睿の弟慶俊が、嘉慶二年(一三八八)九月五日に建立した日興上人と父母の三基は、上人滅後わずか五十五年のものである。この日は母妙嚴の三十三回忌に当たっていて、日興上人と父隆覚の板碑も同時に建立したようである。母の板碑は1の78番(一五八・一九四頁)、父の板碑は1の69番(一五七・一九四頁)、日興上人の板碑は1の157番(二六二・一九五頁)を見て欲しい。

また慶俊は嘉慶二年の日目上人の板碑口の174番(一八六・一九六頁)、年代不明の日郷の板碑4の21番(二七一・一九六頁)と日睿の板碑3の22番(二六九・一九五頁)も建立しており、たぶん右の九月五日の三基と同時に建立したものであろう。文和二年(一二五三)四月の日郷入寂に際して慶俊は保田妙本寺にあり、翌年四月には日郷の分骨を妙円寺に納めていて、後年妙円寺を兄日睿から

相続するのである。

今回調査した十六箇所の石塔群は、日興門流(日郷門流)の法灯が日向(宮崎県)の地に脈々と受け継がれてきた歴史を雄弁に物語っている。その銘文は曼荼羅本尊の脇書と同様、信仰に生きた人々の軌跡を知る術となるため、こうしたフィールドワークは大切な作業である。

『興風』十三号

『興風』十三号は平成十二年三月十三日刊で、山上弘道「日蓮大聖人の思想(四)」、坂井法暉「道郷論争と大石寺東坊地の係争」、池田令道「大石寺蔵日興上人書写御書の考察」、菅原関道「方便品読不論争の淵源と展開(中)」、大黒喜道「中世日向国における日興門流の展開」、大黒喜道「真名本「曾我物語」と宗祖遺文「秋元御書」および日興門流の関係について」という内容である。

山上は宗祖の佐渡における思想を前後期に分けて、前期は『開目抄』、後期は『観心本尊抄』を中心に叙述する。特に『開目抄』の「常不軽品の如し」、『観心本尊抄』の「この四菩薩折伏を現する時は賢王と成りて愚王を誠責し、摂受を行ずる時は僧と成りて正法を弘持す」の文に関する説明は詳細で、万人が頷けるものである。また本門の戒壇に



妙円寺趾の石塔群

関して『法華行者値難事』の「本門本尊与四菩薩戒壇南無妙法蓮華經五字残之」の文をどう読み下すべきか、『新定』『昭定』『対照録』と広蔵院日辰の例を挙げて見解を述べる。この時期に本門の戒壇に言及したのは、地涌の菩薩が賢王となつて本門の戒壇を建立するだろうという期待を宗祖がもっていたからであるが、しかしその後の戒壇論については変遷があるとも述べる。なお老婆心ながら付言すると、山上は鎌倉時代に生きた宗祖の思想を語っているのであつて、現代における戒壇論は民主主義に適した考察を行うべきであり、国主が権力を握っていた中世の戒壇論と一緒に考える顕正会の主張は時代錯誤である。

坂井は道郷論争の真偽について検討し、大石寺東坊地の係争の真相を究明する。現在流布する道郷論争の内容は、(日目の後継者をめぐり日道と日郷が対立↓南條家の血筋の力により日道が大石寺を相続↓相続争いに敗れた日郷が安房に退出)という流れであるが、これは後世に作られたもので、大石寺十七世日精の『富士門家中見聞抄』の記述がこのイメージを定着させたと明快に述べる。

次に大石寺東坊地の係争については、勢力が急速に衰えた南條氏に代わって今川氏の代官興津氏が上野郷の地頭となり、日郷が文和二年(一三五三)に入寂して以降に始まるとする。そもそも事の発端は、南條時光が不動産を子息に分割相続するに当たり、大石寺の東側を惣領の南條四郎左衛門時綱に、西側を南條三郎左衛門に譲ったことによる。その後東側は日郷に寄進されて日郷↓日賢と相続し、西側は日行に寄進されたが、日郷が

入寂するや日行は先手を打って、自分は東側も寄進されたと興津氏に訴えた。対して日賢はその不当性を駿河守護の今川氏に訴え出て、東坊地の係争が始まったのである。日行が応安二年(一二六九)に入寂して後は後嗣日時が係争を引き継いだ、守護の今川氏は氏家・泰範の二代にわたって日賢に理ありとした。しかし明徳三年(一三九二)日時が鎌倉府に目安を提出し、その後も様々に働きかけた結果その主張が通り、状況が一変した。日時に対する安堵は鎌倉府から駿河守護↓上野地頭と伝達されて、応永十年(一四〇三)今川泰範が日時に大石寺を安堵し、応永十二年の地頭興津法陽の去状によつて、東坊地を含めた大石寺は日時が知行することとなった。そして不本意ながら日伝

(日賢から改名)が東坊地から退出し、係争は終結したのである。理は日伝にありながらも日行・日時勢いが勝つたのは、没落する南條氏に代わって大石寺を支えた奥州や下野の法華講衆が加勢した結果であるとする坂井の指摘は正鵠を射ているだろう。

日道と日郷に争いはなく道郷論争は事実無根であるが、東坊地の係争があたかも日道と日郷の相論に端を発したかのように語られてきたことに対して、初めて公正公平な立場からメスを入れた秀逸な論文である。稿末に「東坊地係争関連略年表」が付してある。

池田は大石寺所蔵の「御筆集」二冊(第1集・第2集)について考察する。第1集には高橋六郎兵衛入道・妙心尼・窪尼・持妙尼関係の十六通、第2集には南條時光宛の十五通の消息が収録されている。結論としては、第1集は高橋氏とその妻女宛の消息のみを収録したもの、第2集は南條氏一人を宛所にした消

息集のみを収録したものであるとする。詳細な検討により、妙心尼・窪尼・持妙尼の呼称はすべて高橋氏の妻女のことであると推定し、それによる書名・執筆年の変更等について提起した地道で堅実な研究である。

菅原は日仙と日代の方便品読論争について論ずる。日興上人の一周忌法要を控えた正慶三年（二三三四）正月七日、重須の日代が大石寺の日仙を訪ねた。その際日仙は、宗祖や日興上人が説かれた述門無得道義を理由に方便品を読誦したくない旨を述べたが、日代は宗祖や日興上人が平生読誦されていたことを理由に読誦すべしと返した。これが論争の発端である。かつて日興上人は不読誦を主張した天目房を謗法と非難し、所破のために方便品を読誦するとしたから、日代はひたすらこの点を主張すれば良かったが、日仙が方便品や述門に得益があるかと執拗に迫ったため、得益ならば二乗作仏や提婆達多・童女の成仏が説かれているし、本門開会后に述門は本門と齊等になると答えたことが、本迹一致説ではないかと誤解を招いたようである。しかし日興上人に薫陶を受けた日代が一致論者であるはずがなく、これは日仙に何とか方便品を読誦させようという思いからの発言であった。述門無得道を説いた宗祖が平生方便品を読誦されたのは、日興上人の仰せのように、所破のための読誦と理解するのが一番すっきりしている。菅原は日道や日順の説についても言及する。

大黒の「中世日向国における日興門流の展開」は、中世日向国における日興門流（日郷門流）の始まりとその後の展開について論ずる。広く諸文献を渉猟し、先行研究は無論のこと、今般の

『興風叢書』（5）「宮崎県題目石塔調査レポート」で得られた新たな情報も活かしつつ、①定善寺②本善寺③本東寺④妙国寺本要寺⑤小松寺大原寺⑥本覚寺寺迫⑦妙円寺⑧蓮徳寺⑨顕本寺本永寺⑩本蓮寺要法寺妙興寺⑪本源寺の各寺院・僧坊に即して論述した優れた論文である。大黒は本稿を「中世の九州は中国大陸との交流からも非常に経済力があつたと見られ、その豊富な経済力を背景にして（中略）日向―安房の間を数多くの法華衆僧俗が往復している。そして、その間には和泉堺の本伝寺や備後の妙秀寺などの中宿が寺院へと発展して、日本列島を東西に結ぶネットワークが形成され、それらが総体として中世の妙本寺・日郷門流を実質的に支えていたのである」と締め括る。

大黒の「真名本『曾我物語』と宗祖遺文『秋元御書』および日興門流の關係について」は、曾我兄弟の仇討ち事件に関して曾我物語と『秋元御書』の記述に関連性があるのではないかと指摘した初めての論文である。真名本の妙本寺本『曾我物語』は昭和六年に発見され、翌年にはその存在が世に広く知られるところとなったが、その巻第一に「曾我の十郎助成、同五郎時宗兄弟二人計^{コッ}、不^フ憚^ニ將軍家陣内^を」とあり、これが『秋元御書』の「祐成・時宗が大将殿の陣の内を簡^{えら}ばざりしは」（昭定一七三四、新定二〇八〇、全集一〇七四）という文章と非常に近いものがあると大黒は感じ取り、ともあれ真名本か、それともその成立の元となった原曾我物語かは不明ながらも、弘安三年の『秋元御書』と曾我物語に何らかの接点を想像することは十分許されるだろうと述べる。なお近年『秋元御書』は日興写本断片が発見されたので信憑性の高い宗祖遺文となった。

恵日だより

ご案内・お知らせ

*元朝・正月勤行会のご案内

令和三年の元朝勤行会・正月勤行会は、新型コロナウイルス対策として、例年とは異なる形での奉修となりますので、よろしく願います。

【奉修日時】

一日 午前〇時、十時、午後二時

二日 午前十時 午後二時

三日 午前十時 午後二時

なお、一月一日の午前十時と午後二時

の正月勤行会のみ、混雑が予想されます

ので、両勤行会とも人数を各四十名とし、

事前申込制とします。受付は、本堂掲示

板の参詣者名簿に記載するか、受付に電

話申し込みをしてください。

他の各時間の奉修は、人数の制限はありません。

また、例年のお屠蘇・昆布の儀は、感染予防の観点から、本年のお正月は、取り止めることになりました。あしからずご了承ください。

*成人式のご案内

今年の成人式は一月十一日(月)午後二時より、源立寺本堂にて奉修いたします。檀信徒のご家族で該当される方(平成十二年(二〇〇〇)四月二日〜平成十三年(二〇〇一)四月一日)は、お申し出下さい。(十一日以外をご希望の方は、ご希望の日時をお申し出ください。)

当日は読経唱題の後、法華講より花束贈呈、ご住職からのお祝いなどが予定されております。

*合同役員会のお知らせ

一月十日(日)の新年初お講終了の後に、幹事・地区役員合同の役員会を開催します。地区の活動を円滑に行うために、

【訃報】

〔大阪地区〕淀川区

清浄院妙洋信女 九月三十日寂

俗名藤原洋子之霊 行年七十九歳

〔北摂地区〕箕面市

信力院法護居士 十一月十九日寂

俗名宮川力夫之霊 行年八十五歳

〔槻木地区〕宝塚市

華光院妙照信女 十一月二十九日寂

俗名佐久間結花之霊 行年五十九歳

この度、右の方々がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。

幹事・地区役員さんへご参加下さい。

*役員研修会中止のお知らせ



AMABIE

一月二十四日（日）開催予定の、本年の役員研修会は、昨今の状況から中止いたします。

*各種行事の参詣について

各種行事は、行事予定表の通り行いますが、参詣の際には、マスク着用や手洗い・手指の消毒等、感染予防に努めて下さい。

また参詣前に必ず体温測定し、三十七度以上ある場合は、参詣をご遠慮下さい。

※源立寺本堂の玄関・トイレ前等にアルコール消毒液が置いてありますので、参詣の際はご利用下さい。

【睦月詠草】

念願の四代揃ひて早春の

野鳥に会ひぬ伊丹昆陽池

初めての雛人形を買ひ求む

六人目の孫健やけくあれ

〔和風〕

悠久の大義に殉ずとひた信じ

生命果たしし若人あまりに多き

侵略のいくさとも知らず耐へに耐へ

過ぎしし月日いま何とせむ

〔故奥はつ〕

【恵日俳壇】

小豆粥ひとりひとりの塩加減

寒鴉村一望にして飛び立ちぬ

冬山もうがい手洗い無事登る

石段を登ればまぶしい冬日向

三密を避けて一人の初参り

〔農婦〕

〔森秀之〕





一月の行事



一日(金) 午前〇時 元朝勤行会

一日～三日 午前十時・午後二時 正月勤行会

七日(木) 午後二時 広基寺初お講

十日(日) 午後一時 初お講・合同役員会

十一日(月) 午後二時 成人式

十三日(水) 午後一時 お講



※二月号の継命・恵日発送は、

『槻木』地区が担当です。

三月号の継命・恵日発送は、

『大阪』地区が担当です。

令和三年度 年回表

壺	周	忌	令和二年
三	回	忌	令和元年 (平成三十一年)
七	回	忌	平成二十七年
十三	回	忌	平成二十一年
十七	回	忌	平成十七年
二十三	回	忌	平成十一年
二十五	回	忌	平成九年
二十七	回	忌	平成七年
三十三	回	忌	平成元年 (昭和六十四年)
三十七	回	忌	昭和六十年
五十	回	忌	昭和四十七年

恵日

令和三年一月号 通卷三二二号
令和三年一月一日発行

編集兼
発行人

菅野 憲道

恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (〇七二) 七五一三二三五

E-Mail kanno@wombat.zaq.ne.jp

購読料(含送料) 年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室会計

〒振替 口座番号 0138012112649